第４章　高齢者の社会的ネットワーク

－ 京都府美山町集落調査の事例より －

中央農業総合研究センター　原（福与）珠里

1　はじめに

本稿において高齢者の社会的ネットワークを取り上げるのは，個人がその人生において形成したり離脱したりする人間関係の網の目である社会的ネットワークは，その個人の生活を理解する上での重要な指標となっていると考えるからである。

高齢者の社会的ネットワークの研究史は，主に社会的な孤立との関連で始まり，研究過程でストレスの緩和作用や主観的幸福度との関連性が指摘されるようになる。そして，高齢者をとりまく「サポートシステム」として，社会的ネットワークはとらえられるようになる。

日本における実証調査は，1980 年代から多様な視角で実施されてきている。その中で，日米比較をおこなった藤崎は，日本の高齢者のネットワークの特質を「甘え」「集団主義」「属性主義」の３つの価値意識と関連づけ，子供との同居率の高さやネットワークにおける親族比率の高さを説明している。また東京都老人総合研究所の大規模な面接調査による研究では，日本の高齢者が子供を中心としたネットワークを形成していることを特に女性の場合追認する一方で，夫婦関係に焦点をあてた分析が有効なこと，友人の重要性も高いこと，友人ネットワークは日常生活における諸活動とむすびついていることなどが示された（西下（1987），玉野ら（1989））。

これらの都市高齢者を対象とした研究に対し，農村に居住する高齢者については調査例が少ない。その中で松岡（2003）は，高齢者の幸福感と自立について，都市高齢者と農村高齢者を比較し，役割から解放され選択縁を中心に人間関係を形成している都市居住者に対し，農村の高齢者は役割に基づき行動し，血縁・地縁を中心とした人間関係を形成しているとする。そして，それぞれのライフスタイルや価値観の違いから，高齢者の幸福を一概に論ずることはできないとしている。

このように，農村における高齢者の社会的ネットワークについて検討する際には，いわゆる地縁血縁ネットワークの比重，その中に子供がしめる位置，選択縁による友人ネットワークの形成状況とその契機が焦点になると考える。本稿では，京都府美山町で実施した調査結果に基づき，多くの場合子供世代と同居していない山村の高齢者のネットワーク実態を把握し，その日常生活における諸活動，とりわけ地域振興に関わる活動との関連について考察したい。

2　美山町調査の概要

(1) 調査地の概要

調査対象の京都府美山町は，京都府東部に位置する。総世帯数 1,736 世帯のうち，農家は 861 戸（49.5%）である。山林比率が 94%で農地は狭隘であり，農家戸数 861（2000 年）のうち，販売農家は 611 戸，専業農家は 97 戸（全農家の 11.3%）にすぎない。

老齢人口比率は町全体では 33.0%である。基幹的農業従事者 315 人のうち，65 歳以上の高齢者は 213 人と 7 割近くを占めている。

町は 5 つの旧村からなり，その内の 1 つ「知井」内に，2 つの対象集落（北・田歌）は存する。北集落は，「かやぶきの里」として有名で，1993 年には重要伝統的建造物群保存地区に選定された地区である。田歌集落は，北集落より谷筋を奥に進んだところにあり，福井県境の峠にほど近い。町内では最も町外からの移住者の多い地区であるという。

(2) 回答者

京都府美山町における住民調査は，2003 年 12 月，町内 2 つの集落（北・田歌）の全世帯を対象に個別訪問面接により実施した。各世帯における回答者は，特に指定せず依頼した。回答者は男性・高齢者の比重が高い分布となった（第 1 表）。北集落 35，田歌集落 25 の計 60 戸の回答が得られた。そのうち 65 歳以上の高齢者の回答は，北集落 21（60%），田歌集落 11(44%)の計 33 件である。これら 33 戸以外で，65 歳以上の高齢な家族がいる回答者世帯は，北集落で 4 件（70 代後半 2 件，80 代前半 2 件），田歌集落で 3 件（80 代前半 1 件，90 代前半 2 件）であり，全体で 3 分の 2（40 戸）の世帯には 65 歳以上の高齢者がいることになる。

第1表　美山町聞取り調査対象者数－居住集落・性別・年代別－

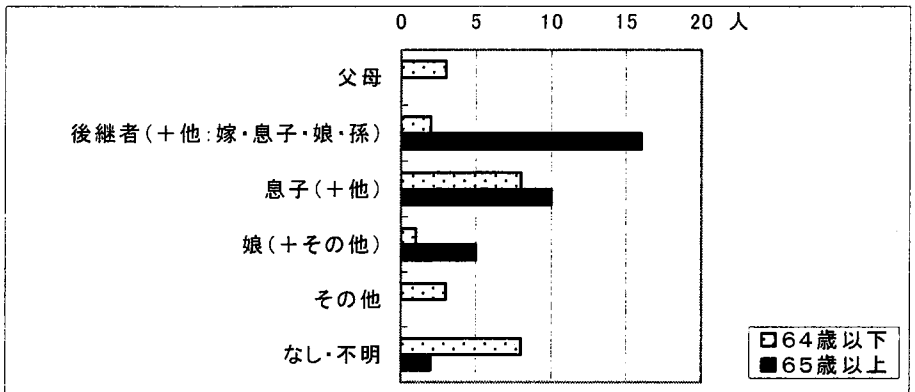
（単位:人）

		年代		～40代	50代	64歳以下	65歳以上	70代	80代以上	不明	合計
調査地	北集落	性別	女性	1		1	1	2	1		6
			男性	3	3	3	7	11		2	29
		合計		4	3	4	8	13	1	2	35
	田歌集落	性別	女性	2	1			4			7
			男性	6	2	3	1	5	1		18
		合計		8	3	3	1	9	1		25
	計			12	6	7	9	22	2	2	60

第2表　年代別、性別、家族形態別の調査対象者数

（単位：人、%）

	性別	家族形態 夫婦2人	夫婦＋子	2世代夫婦	片親＋夫婦（＋子）	独居	その他	合計
回答者年代64歳以下	男性	4	8		7		1	20
	比率	20.0	40.0		35.0		5.0	100.0
	女性		4		1			5
	比率		80.0		20.0			100.0
	計	4	12		8		1	25
	比率	16.0	48.0		32.0		4.0	100.0
65歳以上	男性	14	2	2	1	5	1	25
	比率	56.0	8.0	8.0	4.0	20.0	4.0	100.0
	女性	1		2		4	1	8
	比率	12.5		25.0		50.0	12.5	100.0
	計	15	2	4	1	9	2	33
	比率	45.5	6.1	12.1	3.0	27.3	6.1	100.0



第1図　回答者年齢別　別居家族続柄

注：　別居家族で、後継者（＋他：嫁・息子・娘・孫）とは、後継者が独居する場合と、伴侶や子供などをもつ場合の両ケースを含めた後継者人数である。以下、同様

家族形態は，65 歳未満では，「夫婦＋子」の核家族がほぼ半数で，親世代との同居は 32% にとどまる。65 歳以上では，「夫婦 2 人」が 45.5%，「独居」が 27.3%と若年世代と同居していない回答者が 7 割をこえる（第 2 表）。別居している家族について質問したところ，65 歳以上の回答者のほとんどが「いる」と回答しており，主に後継者（とその家族），それ以外の息子，また娘が指摘された（第 1 図）。居住地については，町外が多い。

農業従事状況を見ると（第 3 表），65 歳未満層では，農業に従事している世帯主が 8 人（32%）その妻では 5 人（20%），65 歳以上層では，世帯主で 25 人（75.8%）その妻では 16 人（48.5%）であった。農業に従事しているといっても，自給用の生産が中心ではあるが，65 歳以上層の農業従事度の高さを示す結果となった。また，同居の後継者，およびその妻についても農業従事状況をたずねているが，後継者の妻で農業に従事しているケースは皆無であった。後継者が農業に従事している回答者は，65 歳未満層では 1 人のみ（4%），65 歳以上でも 4 人（12.1%）であった。

第3表　家族の農業従事状況

（単位:人）

	回答者年代	有	無	非回答
世帯主	64歳以下	8	9	8
	65歳以上	25	7	1
	計	33	16	9
妻	64歳以下	5	9	11
	65歳以上	16	4	13
	計	21	13	24
母	64歳以下	3	2	20
	65歳以上	0	0	33
	計	3	2	53
後継者	64歳以下	1	4	20
	65歳以上	4	2	27
	計	5	6	47

3　生活における社会的ネットワーク

(1) 調査結果

社会的ネットワークの調査方法は，未だ確立されているとはいえず，目的に応じていくつかの方法がある。ここでは，人間が他者と交流を持ちやすい場面，すなわち日常生活においてサポートを必要とする場合の多い10項目[1]について，同居世帯員以外でサポート源となる人物をたずね，その性別，居住地，回答者との関係についてさらにたずねた（2人までたずねたが，本報告では1人目についてのみまとめている）。質問の10項目は，先行研究でよく使われる「サポートを必要とする状況」だが，このサポートの概念は必ずしも資源ある者から無い者への援助ということではない。相互の精神的な交流や価値の認知などを含むものである。

これら10項目のうち，「必要なとき，車に乗せてと頼める」「互いに訪問しあい，楽しく時を過ごせる」「同じ趣味について一緒に楽しみ，語り合える」「家族・子供など個人的問題を相談し語り合える」の4項目について結果を示している（第4表）。

「必要なとき，車に乗せてと頼める」（表中では「乗車依頼」）というサポートは，生活上の道具的サポートを代表するが，特に車の運転をしない場合の多い高齢者にとっては重要な内容である。65歳以上の女性は非回答が半数だが，男性回答者では，サポートの与え手の性別は男性，居住地は集落内，関係では親戚がいずれも多く，回答者の多くが集落内に「親戚」をもつこと，その関係は日常的な支援を頼めるものであることがわかる。

「互いに訪問し合い，楽しく時を過ごせる」（「相互訪問」）は，回答者の社交活動の相手をたずねたものである。65歳以上の男性では，男性，集落内，親戚がそれぞれ最も多い回答であるが，65歳未満と比較すると，女性，町内の回答が多いことを指摘できる。また，関係については65歳未満では友人が最も多く，65歳以上でも友人との回答があるが親戚の半数未満であることとは対照的である。女性回答者については，性別では女性が圧倒的，居住地は集落内のみ，関係は，友人，隣人，親戚などにわかれている。性別の比較をすると，女性は地域的に集落内に限定された社交生活であるのに対し，男性は広域のつ

第4表　日常生活のサポート源

（単位：%）

サポート内容			乗車依頼				相互訪問				趣味を共に楽しむ				個人的相談			
回答者	年齢・性別		64歳以下		65歳以上		64歳以下		65歳以上		64歳以下		65歳以上		64歳以下		65歳以上	
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
サポート源属性	性別	①男	40.0	60.0	64.0	50.0	65.0	40.0	52.0	0.0	65.0	40.0	28.0	12.5	65.0	40.0	36.0	12.5
		②女	15.0	20.0	8.0	0.0	15.0	0.0	28.0	87.5	10.0	0.0	32.0	75.0	15.0	20.0	24.0	37.5
		非回答	45.0	20.0	28.0	50.0	20.0	60.0	20.0	12.5	25.0	60.0	40.0	12.5	20.0	40.0	40.0	50.0
			100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	居住地	①集落内	55.0	40.0	64.0	25.0	50.0	40.0	56.0	100.0	45.0	20.0	40.0	75.0	35.0	40.0	32.0	50.0
		②知井内	0.0	20.0	0.0	12.5	15.0	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0	8.0	0.0	15.0	0.0	0.0	0.0
		③町内	0.0	20.0	16.0	12.5	15.0	20.0	20.0	0.0	15.0	20.0	20.0	0.0	15.0	20.0	24.0	12.5
		④町外	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0	0.0	8.0	0.0	10.0	0.0	0.0	12.5	15.0	20.0	16.0	0.0
		非回答	45.0	20.0	16.0	50.0	20.0	40.0	16.0	0.0	25.0	60.0	32.0	12.5	20.0	20.0	28.0	37.5
			100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	関係	①親戚	30.0	0.0	64.0	37.5	10.0	0.0	52.0	25.0	5.0	0.0	24.0	0.0	20.0	0.0	48.0	37.5
		②友人	5.0	20.0	12.0	0.0	50.0	40.0	24.0	37.5	60.0	0.0	36.0	25.0	40.0	60.0	20.0	12.5
		③同僚	5.0	0.0	0.0	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12.5	10.0	20.0	0.0	12.5
		④隣人	15.0	40.0	8.0	12.5	15.0	20.0	8.0	37.5	10.0	20.0	4.0	50.0	10.0	0.0	4.0	0.0
		⑤その他	0.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0	20.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		非回答	45.0	20.0	16.0	50.0	20.0	40.0	12.0	0.0	25.0	60.0	32.0	12.5	20.0	20.0	28.0	37.5
			100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

きあいがやや多く，親戚を中心とした関係であることが示された。

「同じ趣味について一緒に楽しみ，語り合える」（「趣味を共に楽しむ」）は，生活上の幅広い活動の相手をたずねるものであるが，男性では非回答の比率が高く，そのような活動をする余裕のない回答層の存在を示す。居住地では，集落内が中心だが町内という回答もあり，関係については友人が最も多くなっている。65 歳以上女性では，女性，集落内，隣人がそれぞれ最も多い回答となっている。このように高齢男性では 65 歳未満と比較すれば「親戚」という回答が多いものの，他の質問項目と比較して趣味を楽しむ相手は「友人」という選択による関係であることが示されている。

最後に「家族・子供など個人的問題を相談し語り合える」（「個人的相談」）は，もっとも精神的に深い依存相手を示すものであるといえる。これについても 65 歳以上では非回答の率が高いが，65 歳未満と比較すると，男性回答者では，女性の比率が相対的に高く，町内，町外という広域的な居住をしており，関係については親戚が中心である。

つまり，親戚という関係であることから，性別や居住地にかかわらないサポート源が指摘されているという傾向をみることができる。「親戚」の実態は，兄弟や子供などかなり近い関係であり，「乗車依頼」のような気軽な道具的サポートとは傾向を異にしている。女性については回答が少ないものの，傾向は男性と変わらない。集落内の友人などを中心に挙げている 65 歳未満とは違いがある。

以上のように，65 歳以上の高齢者の社会的ネットワークについて，男性では 65 歳未満層と比較していずれのサポートに関しても「親戚」という血縁への依存比率が高いことが明らかになった。また，そのこと故に，サポート内容によっては，かえって広域，性別にこだわらない依存傾向を示している。兄弟や子供などとりわけ近い関係にある親戚に対する情緒的なサポート依存が示された。一方，女性の場合，「相互訪問」「趣味」など社交生活を中心に集落内の同性同士の関係が強く，65 歳未満の回答と比べて狭い範囲内であるとはいえ相手を選択して活動を行っている様子を把握できる結果であった。

(2) 北集落における事例

以上の調査結果を参照しながら，調査事例についてもう少し詳しくその実態をみてみたい。取上げるのは，北集落に居住する1人暮らしの女性KMさん，NYさんの2名である。

調査対象の 2 集落のうち，北集落は前述のようにかやぶき屋根の民家の景観が有名で，1993 年には重要伝統的建造物群保存地区（以下，伝建地区）に選定された地区である。同年には民俗資料館が地区内にでき，翌年は「お食事処きたむら」，さらに翌年には民宿「またべ」が営業を開始した。2001 年にはこれらと，以前から営業していた「北村きび工房」を統合し，有限会社「かやぶきの里」が設立される。村人の出資によるものであり，地区が1つになって地域興しをしようとするものであった。

現在では，年間 20 万人以上の来訪者があり，週末を中心に忙しい営業活動がおこなわれている。従業員は全部で 38 名，全員が美山町の住民で，うち 26 名は北集落の居住者である。これらの活動につれて，集落の人々の意識やライフスタイルが変化してきている。「美山町北　保存地区の歩み」(保存地区 10 周年記念行事実行委員会　2003, 12) 所収の地区住民を対象としたアンケート調査結果によれば，伝建地区に指定されて 10 年たって「仕事場や収入が増えてきた」82%，「若者の働く場が増えてきた」79%，「地域や町の発展のため何かの役に立っているのではないかと思えるようになってきた」81%，「村や地区の将来に希望がもてるようになった」70%など，きわめて肯定的な評価がなされている。

【NYさん】

NYさんは 66 歳，生活の基本は年金生活であるが，民宿「またべ」の調理にたずさわり，「かやぶきの里」の取締役（会合が月に 2 回程度）もつとめている。「仕事について話し合える」サポート源としては，集落内の男性の同僚，女性の同僚をあげている。「地域に役立つ活動」を共にする相手については，「会合など組織の中で」という回答で特に個人はあげられていない。取締役についてはより若い世代への交代をNYさんは望んでいるが，まだまだ寄せられる期待が大きいようだ。

美山町内の他集落の出身で，就職して他出したが，昭和 34 年に結婚してからはずっと北集落に居住している。2 人の息子（42 歳，38 歳）は，いずれも他出し町外で安定した職を得て結婚している。今のように若い人の就業先があれば集落内に残るよう説得したかも知れないと話す。自給用の野菜を栽培しているが，これは民宿でも利用している。息子たちは 2 人とも，用事で帰省した折りなどには農業の手伝いをする。長男の妻は共働きでもあり，NYさんが子供の世話に泊まりがけで出かけることも多い。子供世帯との関係は，このようにNYさんがサポートの与え手となっている面も強い。

夫を亡くして 25 年になり，それ以来母子家庭の自立援助に関わる活動に携わってきた。その関係で中国へ研修旅行の経験もあり，現在も団体に所属してボランティア活動をしている。さらに現在は，民生委員としても活動している。「自分の意見を尊重してくれる」相手として，知井内の民政委員として接している女性を 2 人あげている。

集落内の活動では婦人会，農協婦人部に所属している。趣味の活動としては他集落で俳句教室（月 1 回）に参加している。「趣味を共に楽しむ」相手としては集落内の女性の友人

が2名あげられた。「相互訪問」の相手もやはり集落内の女性の友人が2名あげられている。

車の運転はしないが，集落内は徒歩で問題なく，民生委員の仕事も（担当は2集落）自転車で行える。必要な買い物などは移動販売のほか，配達も利用し，その他はバスを利用している。「乗車依頼」ができる相手として，町内に住む兄，集落内の親戚（男性）をあげている。また，「個人的相談」の相手としては，集落内の親戚（夫婦）2組をあげた。

ＮＹさんの「組内」は 10 軒，民宿，お寺，大学の先生，鶏屋さん，独り者などユニークで，Ｉターン（新住民）の夫婦もいる。年に1回程度組長の家に集まって寄り合い，親睦の機会をもっている。「職業・慣習について興味をもってくれる」のは，そのような隣人（新住民も含む集落内の女性2名）である。寄り合いの席などで，郷土料理などが話題になっている。伝統の中にある栄養などの良い面を若い世代に伝えていくことが大切だとＮＹさんは考えている。

【KMさん】

KMさんは 76 歳でもともと北集落の出身である。結婚後，京都市内に居住していたが 30 歳代半ばで帰郷し，学校給食の仕事をしてきた。昨年までは，「食事処きたむら」で働いたが 75 歳までということで，現在は資料館の仕事を週1回担当している。

50 歳代の息子が2人，娘が1人おり，いずれも他出して結婚している。3年前に夫を亡くしてからは1人暮らしである。長男はいずれ帰ってくる予定である。同居しに来いと言われるが，ここなら知り合いも多いし行きたいとは思わない。ほぼ毎週末に長女夫婦（隣町居住）がきてくれ，家の必要な用事をしてくれる。また車の運転はしないので，月に 2 回くらいは長女夫婦と共に車で買い物に行く。「乗車依頼」の相手としてあげられたのは，集落内の男性の親戚と女性の隣人である。もし，自分の具合が悪くなったときは長女に世話を頼めるという。「個人的相談」の相手としてはこの長女と長男，「自分の意見を尊重してくれる」のは長女と次男をそれぞれあげている。

日常生活で頼りにしているのはすぐそばにすむ従兄弟夫妻で，毎日顔を出して，お茶を飲んだりしている。顔をだすのは元気なことを確認してもらうためでもある。安心感がある。「乗車依頼」であげられている1人はこの従兄弟である。

学校関係の退職者の会に所属し，老人クラブにも所属している。また，サークルというわけではないが仲のよい7人で集まっては話をしたり会食をしたり内職なども共におこなっている。

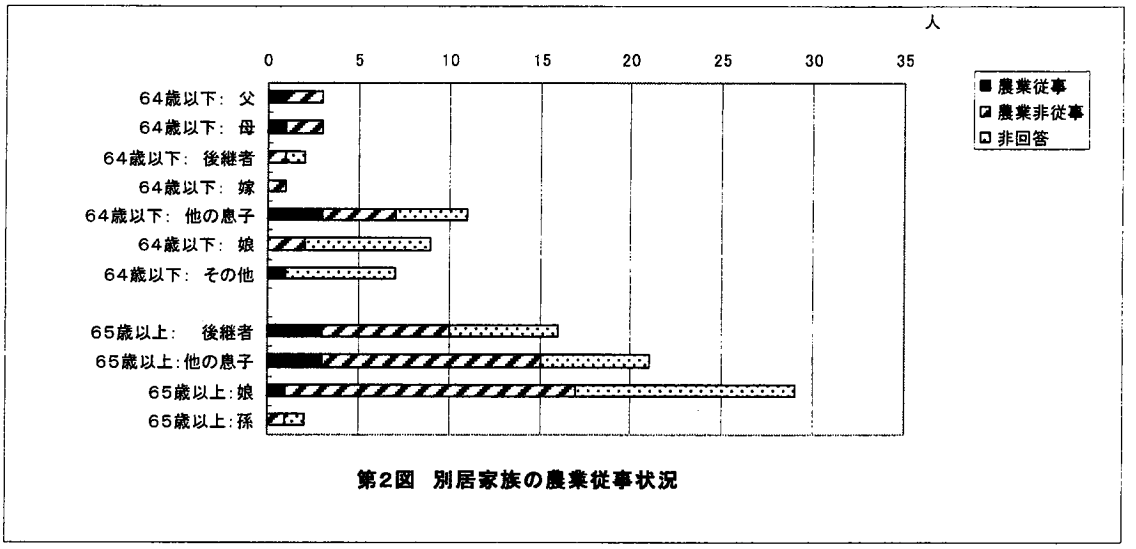
30ａの畑があり，野菜を作付けている。無人販売や「きたむら」で販売もしているが，ほぼ自家用である。「きたむら」へは3日に1回は野菜だけでなく漬け物なども持って行っている。以前働いていたので，そこで少ししゃべったりする。別居している子供たちが農業を手伝うことはない。

仲良しグループは後家さん仲間で，皆畑をしているので，雨の時などを中心に連絡をしてそれぞれの家を回り持ちでたずねる。マスコット人形などを作成し「きたむら」の売店で販売している。「相互訪問」の相手としてあげられたのはこの仲間で，女性の集落内友人である。また，「趣味を共に楽しむ」も同様である。

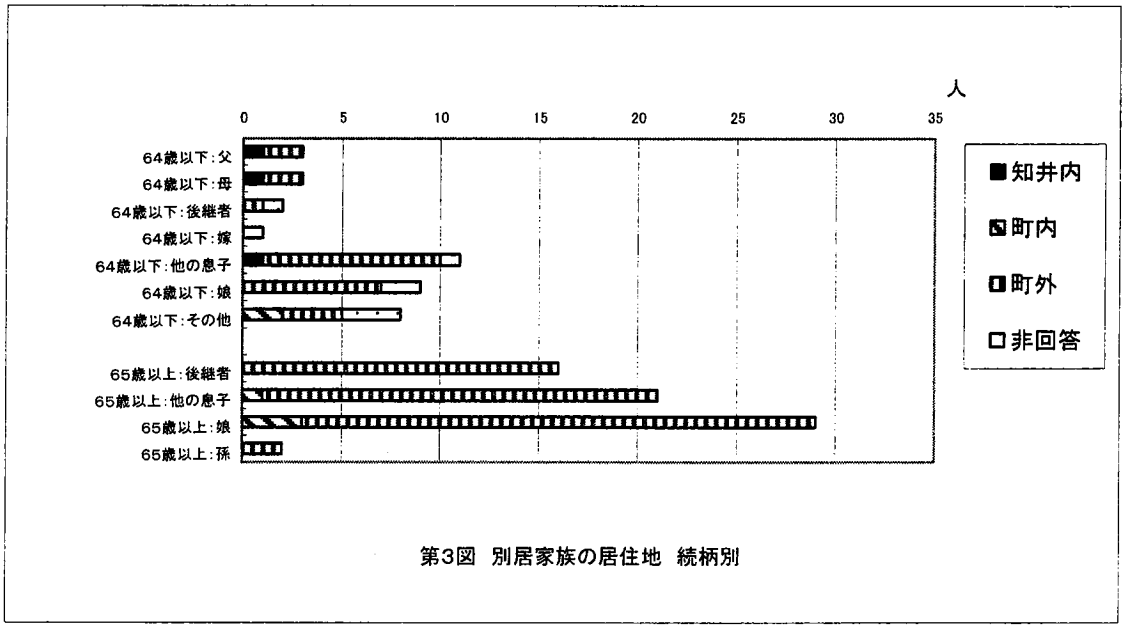
(3) 別居家族の農業従事

以上より，地域興しの諸活動があることから，農業生産物も地元産としての販売・利用先が増え，高齢者の農業生産活動が活かされている。

しかし，別居家族が農業を手伝っているケースはまれである。回答者が農家である場合（33戸中19戸）で5名，非農家である場合（14戸）でも2名が「農業に従事」（農作業の手伝いをすることがある）とされているに過ぎない（第2図）。



第2図 別居家族の農業従事状況



第3図 別居家族の居住地 続柄別

このように別居家族が農作業から遠ざかっている実態は，別居家族の多くが町外に居住していることからも自ずと理解できる（第3図）。事例のＮＹさんのように，帰省のおりには手伝うというのは少数派であり，現在のところは回答者である高齢の住民たちが美山町の農地と地元産農産物の存在を支えているということができる。しかし，一方で，いずれ退職後などに美山町にＵターンする別居家族も少なくないことが予想され，その意味でも，現在の高齢者による農業が農地の保全という観点からも重要であることが指摘できる。

4　むすび ― 高齢者の果たす役割 ―

若年世代と同居する比率の低い美山町の高齢者を対象とした調査結果より，集落内の友人を中心とした高齢女性のネットワーク，また親戚を中心とした高齢男性のネットワークの実態があきらかになった。地域興しの活動と関わって，これらのネットワークが趣味や実益と結びついていることには注目しなければならない。このようなネットワークの存在が高齢住民の日常生活を支えていること，その意味でサポートの与え手と受け手はおおまかにみれば互酬的であることも指摘されねばならない。

一方，別居のこどもがネットワーク内にしめる位置は，ほんとうに困ったときに頼れる相手，精神的なサポートの与え手として重要であるだけでなく，高齢住民の意見を尊重し，サポートをあてにする存在としても浮かび上がってきた。このように別居しているこどもは，重要なサポート源ではあるものの，上記の地域内ネットワークと補完的であると考えられる。

農業に関していえば，農地の保全により，別居家族の帰る場所・農業復帰の可能性をまもり，地元産農産物の生産により民宿，食事処，売店の質を支えている。観光客に対して彼等が農業をしている「姿」を示すことにも大きな意味がある。さらに，地域興しと関わって，マスコットなどの作品作成や民俗資料館の運営や新規移住者の世話などを通じた文化継承をおこなっていることも，高齢者の役割として無視できない重要なことである。

調査の回答者たちは，「北集落（むら）の高齢者は元気といわれる」ことを何度も強調していた。地域振興の様々な活動は大変だが，プラスかマイナスかといわれればもちろんプラスだというのが彼等の評価である。これらのことについて，地域振興活動の側からは，高齢者に「生き甲斐」を与えている，あるいは，若年層の本格的担い手との間の「つなぎ」といった評価もないわけではないが，そのようなやや消極的な評価ではなく，かやぶきの里という地域興しを実際に具体的な労働や知恵で支えているのが，かれら高齢の住民たちであるという視点を忘れてはならないと考える。

[注]

(1) 文中に記載の4項目以外の6項目とは，「病気のとき，子供の世話を頼める」，「病気のとき，老親の世話を頼める」，「仕事に関する考えや夢を語り合える」，「地域に役立つ活動に参加したり，組織運営を語れる」，「自分の意見や助言を頼りにしてくれる」，「職業経験，技術，地域慣習に興味を持ち，聞いてくれる」である。

[参考文献]

直井道子（1993）『高齢者と家族』（サイエンス社）
西下彰俊（1987）「高齢女性の社会的ネットワーク —友人ネットワークを中心に— 」（『社会老年学』NO.26）
藤崎宏子（1998）『高齢者・家族・社会的ネットワーク』（培風館）
杉岡直人（1990）『農村地域社会と家族の変動』（ミネルヴァ書房）
玉野和志他（1989）「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」（『社会老年学』NO.30）
原（福与）珠里（2005）「農村における高齢女性のパーソナル・ネットワークに関する考察」（『村落社会研究』第11巻第2号）43～53ページ
松岡悦子（2003）「高齢者の幸福感と自立をめぐって—都市の高齢者と農村の高齢者の比較より—」（『現代社会学研究』VOL.16）43～60ページ

[後記]

美山町集落調査は2003年12月に実施した。調査員は，相川良彦・會田陽久・渡部岳陽（以上，農林水産政策研究所），秋津ミチ子（たかはた共生塾），岩見良太郎・本城昇（以上，埼玉大学），叶堂隆三（福岡国際大学），高田知和（早稲田大学）と筆者であった。調査設営にご協力いただいた（財）農政調査委員会，美山町役場・知井振興会，そして多忙な中で調査に応対いただいた田歌・北2集落の世話役と住民各位に，心より感謝したい。